小説総会屋

長編小説

三好

説総会屋三好徹

光文社

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども お書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編小説　小説 総会屋

昭和53年6月30日　初版1刷発行
昭和53年7月20日　3刷発行

著者　三好徹（みよし とおる）
発行者　小保方宇三郎
印刷者　萩原崇男
東京都文京区後楽2-21-12
萩原印刷

発行所　東京都文京区音羽2　振替 東京6-115347
株式会社 光文社
電話 東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（複本製本）
© Tōru Miyosi 1978

（分）0-0-93（製）92037（出）2271（0）
Printed in Japan

小説　総会屋――目次

株主総会　7
ホメカツ　25
大　物　44
不正の請託　62
陰謀家　79
ペーパー取引　97
色と欲　115
欲と色　134

小説 総会屋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

総会対策 152
内部の敵 171
総会屋道 189
挑　戦 206
黒い噂 224
総会前夜 242
三カク主義 261
決　戦 279
勝者と敗者 297

装幀　辰巳四郎

小説総会屋

三好　徹

株主総会

1

大手商社の一つである三星通商の株主総会が開かれたのは、六月三十日の午前九時だった。

会場は、都心のT会館九階のシルバールームがあてられた。

午前九時というのは、ずいぶんと早いようであるが、この時間の開会を手配したのは、総務部次長の兼平だった。

打ち合わせの会合のとき、担当役員の野瀬は、

「九時というのは、早いんじゃないかね。わたしはいいが、社長をはじめ、ふだんは十時ごろに出てくるほうが多いのだから、十時とか十時半がいいんじゃないか」

といった。野瀬は四月の異動で、役員に昇格したばかりであった。老齢の社長をいたわっての発言ともうけとれた。

「兼平君、どうかね？」

と総務部長の沼沢がいった。

「はァ、それは、もちろん考えたのですが、この日は各社の総会が集中しておりますものですから……」

「それはわかっている。だから早めに確保しておくようにと、前に指示しておいたじゃないか」
と野瀬は眉をひそめていった。
「申し訳ございません」
兼平は頭を下げた。
「T会館にしたって、日ごろから使っているんだし、それくらいの都合はつけてくれるんじゃないかね。三星通商は、あんな早い時間にしか取れなかった、と笑いものにされたらどうする気だ？」
「申し訳ございません」
兼平は再び頭を下げた。
「何とかならんのかね。もし何なら、一流ホテルに会場を移しかえたらどうだ？　せいぜい、二、三十分なんだから、いまからでも都合できるんじゃないのか」
「それが……実は、案内状の印刷も発注してありまして、変更するとなると……」
「しようがないな」
「この時間での開会を、ぜひともご決済いただきたいと思います」
「九時とはねえ。いままでに例のないことだ。社長もびっくりなさるんじゃないかな」
「今後は兼平君にも気をつけてもらうことで、いかがでしょうか」
と沼沢がとりなした。
「やむをえないな。次回からは、ちゃんと手配してくれたまえ」
野瀬は重おもしくうなずいた。
ちょうど正午で、打ち合わせの会合は終わりになった。まず野瀬が席を立ち、ついで沼沢があとを追った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「やれやれ、といったところだね。まったく芯が疲れるよ」
居残ったひとりがトントンと肩を叩きながら呟いた。古参の奥田という社員だった。
「おれは、いやンなったね。よほど、このドあほ！　とどなってやろうか、と思ったよ。こっちの苦労もわからねえで、あんなバカなことをいいやがる。頭にきたな」
背広の袖に手を通しながら、そういったのは、兼平だった。
戸田清介は、思わず兼平の顔を見つめた。
ついさっき、申し訳ございませんの言葉をくりかえして野瀬に叩頭していた兼平とは、同じ人間とは思えないような気がしたのだ。
戸田は、四月の異動で、係長に昇格し、営業畑から移ったばかりであった。部内では、文字どおりの新参者である。会合の席上でも、まったく発言せずに、出席者の言葉に耳を傾ける役に終始した。従来のしきたりがわからない以上、発言もできなかった。
それにしても、いやな感じだな、と戸田は思った。本人の前ではペコペコしていたくせに、いなくなった途端に、悪口雑言をいう。
一言でいうなら、陰険である。いいたいことがあるなら、陰でコソコソいわずに、堂々と主張すればいいではないか。
総務部内にこういう雰囲気が底流として存在しているならば、いやな職場に配置されたものである。口をきくのに、よほど気をつけねばならない。
「おい、戸田君、めしにつきあえや」
と兼平が声をかけた。
いや、とはいえなかった。上役として、この先、どちらかが異動になる日まで、顔をつき合わさなければならない運命にあるのだ。

ビルを出ると、兼平は、横町を入った路地の奥にある小料理屋へ入って行った。
そしてお昼の定食を注文してから、
「おれが野瀬さんのことを罵ったので、びっくりしたらしいね」
「ええ、まァ……」
「十時にとろうと思えば、十時にとれたさ。いまからだって、その気になれば取れるが、九時にしたほうがいいんだ。そこにこっちの苦心があるんだが、あの人にはわかっちゃいない。バカな話さ」
兼平は肩をすくめていった。

2

戸田は、運ばれてきた食事に箸をつけながら、どういう意味だろうか、と考えた。
野瀬がいったように、九時よりも十時のほうが、総会にふさわしい時刻のように思われる。九時に開会したからといって、笑いものになるという気はしないにしても、印象としては、九時開会は早すぎる。
だが、その疑問を口に出さずに、戸田はイカの塩焼きをつまみ、みそ汁をのみ、ご飯をたべた。
兼平もそれ以上は、会場の話にはふれず、話題をかえた。
「噂によると、きみはゴルフがうまいんだってね」
「うまいというほどではないですが、アメリカに駐在していたころ覚えましてね」
「本場仕込みというわけか。いくつで回るんだね？」
「平均して80から85くらいの間です」

「そいつはうまいや。じゃ、あした、ぼくの代わりに出てもらおうかな」
「何かコンペですか」
「つきあいというか、義理でね、出ることになっていたんだが、あいにく家に用事ができて困っていたんだ。出てくれるね？」
「わたしでよければ、出ますが、いいんですか」
「じゃ、頼むよ。朝七時に東京駅前に集合だ。バスで箱根のゴルフ場へ行く。七、八十人は参加するはずだ」
「どういうコンペです？」
「里原（さとはら）経済研究所というところが主催するコンペなんだ。各社の総務担当者はたいてい出るだろうな」
「里原というのは、どういう人ですか」
「俗にいう総会屋だよ。まァAクラスに入る男だね。参加費用は四万五千円だが、それは会社から出る。きみの家から東京駅までのタクシー代をふくめて五万円の伝票を切っておくからね」
「高い会費ですね」
「仕方がないんだ。ま、いいチャンスだから里原をよく観察しておけよ」
「はァ」
「それからいっておくがね、優勝なんて、するなよ。80でまわりそうになったら、三、四発OBをやることだ」
と兼平はつま楊子を使いながらいった。
翌日は土曜日だった。三星通商も休みである。
しかし、ゴルフに行くのは、いっこうに苦にならない。それどころか、久しぶりのゴルフで、

戸田の胸は、はずんでいた。
バッグをかついで、七時前に行ってみると、すでに五十人近い参加者が集まっていた。バスも二台用意されている。
「やァ、どうも」
「久しぶりですね。お元気ですか」
などと挨拶をかわしている者もいるが、戸田の知った顔はなかった。
バスの中で、主催者側の挨拶とルールの説明があり、参加者のハンデは、変則キャロウェイ方式によるとされた。
戸田は、この日、ショット、パット共に好調だった。同伴競技者は、鉄鋼会社の二名と東西銀行の総務係長で、互いに初対面である。
「お上手ですなァ。プロなみに飛びますね」
と銀行員は羨ましがった。
義理で出ているコンペで、気楽に回ったのが結果としてよかったのかもしれない。
戸田はアウト37イン39合計76でホールアウトした。
懇親会までには時間がある。汗もかいているので、戸田は浴室へ行った。
からだを洗っているとき、隣りに小太りの男がきた。年齢は五十前後だろう。二の腕が日やけしているところをみると、ゴルフはよくやっているらしい。
「お背中を流しましょう」
その声に戸田は振り向いた。
いっしょに回った銀行員が、スポンジに石けんをこすりつけて、小太りの男の背後にひかえていた。

「これはどうも恐縮」
「いや、とんでもない。本日はどうもありがとうございました。東西銀行の小菅でございます」
「そうでしたか」
男はおうようにいい、
「成績はどうでしたか」
「どうもメロメロでして100をこえました。先生はいかがでしたか」
「似たようなものですよ。ゴルフというのは本当に難しい」
男はそういって高笑いした。

3

表彰式でわかったのだが、その小太りの男が里原だった。
戸田は優勝こそ逃したが、ベストグロスで、かなり大きな四角い箱を、里原から受けとった。
帰宅してからあけてみると、小型のカラーテレビだった。七、八万円はする品である。
戸田は、月曜日に出社すると、兼平にそのことを報告した。
「かなり高価なものですが、どうしましょうか」
「貰ったものは仕方あるまい。返すわけにもいかんが、だから、いいかげんにやってこいといったんだ。37、39だなんて、全力をつくすことはないんだよ」
兼平は苦にがしげであった。
「はァ」
戸田は釈然としなかった。優勝するなよ、といわれたが、さほど深くは考えなかったのだ。

ベスグロでさえ、いやな顔をされるのだから、優勝したら、どうなったであろう。
その気持ちを見抜いたかのように、兼平がいった。
「要するに、下手すると、あとで高くつくかもしれんのだよ」
「はァ」
「そのうち、おいおいと勉強してもらうが、これから六月末の株主総会までの間は、ほかのことは何もしなくてもいい。総会屋対策だけを考えて処理することが、われわれの仕事なんだ」
「なるほど」
「わが社には、五千人もの社員がいるがね、総務部がどれほど総会のために苦心しているのか、わかっているやつは百人とはいないだろう。情けない話さ」
兼平はプカリと煙の輪を吐いてから、
「この前の打ち合わせのときに問題になった開会の時刻にしてもその一例だが、きみは、ぼくが九時開会で段取りをつけた理由がわかるかね？」
「わかりません」
「総会屋というのは、原則としてA級でもチンピラでも、総会に顔を出さなければ、金にはならないんだ。ことに六月三十日というと、目白押しに各社の総会がある。だから連中は、かけもちで飛び回るんだ。たいていは十時に集中しているが、十時半のところもある。しかし、十一時というのは、もうないね。かれらにしてみれば、それまでの勝負なんだ。したがって、十時半をすぎても総会が終わらないと、もう回れる会場がないから、そこで腰を落ち着けてしまう」
「は、はァ」
「そうなったら、これはえらいことだ。九時にしたのは、連中の便宜のためなんだ。うちの総会を九時十五分までにすませて、タクシーにのって、九時半のところに向かう。かれらも稼ぎにな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com